

伝統的琉球民家の主屋南側に着目した研究

- K家の改修と集落の伝統的民家の改修傾向の関係の考察 -

日大生産工(院) ○清水 杏 日大生産工 篠崎 健一
東京工業大学 藤井 晴行

1. 研究の背景と目的

本研究は、伝統的琉球民家の主屋南側空間に着目し、沖縄県伊是名島伊是名集落において近年なされた顕著な改修の実態を記録し、集落全体の改修傾向と比較し考察することを目的とする。伊是名集落には、赤瓦の伝統的な琉球民家や珊瑚の石垣、フクギが今も集落に残る一方で、現代の構法や材料の導入などによって、集落の民家のつくりや景観が変化している。居住者の住まうための意識と改修行為、空間の使い方の関係性を考察し、これからの伝統的民家の変容と持続の方向性の議論に寄与することを目指している。

筆者らは、民家の雨端^{*1}の改修の特徴を一番座、二番座、三番座の区分に注目し、まとめ報告している¹⁾。報告は、一番座前は収納や室の拡張などの雨端を内部化する改修が多く、二番座前は玄関や部屋などをつくらない、改修を行わない傾向が強い。改修する場合でも、縁側を拡張する、濡縁を設置するなど既存の縁側を活用する傾向がある。三番座前は土間や玄関をつくる改修が多く、三番座前の雨端は改修されやすいことを明らかにした。

本稿の比較・対象とする民家は、集落の前辺^{*2}に位置する K 家と呼ばれる民家である。筆者らが 2019 年までに行なった集落民家の一斉実測調査^{*3}時は、集落の典型的な琉球民家の

つくりを示していた。家屋の南側正面と東側側面に雨端がある。北西にある炊事屋の南には、流しを設えた半外部の軒下空間があり、三番座前の雨端に連続する。主屋南側は、開口部が広く設けられ、居住者の生活の様子が外から溢れ出るような開放的かつ端正な姿が印象的である (Fig.1)。これに対し 2022 年^{*4}には、南側正面にコンクリートブロック (CB) 壁が築かれ、北西にあった炊事屋が南西に移動している。CB 壁の一部にはアルミサッシュが取り付けられ、玄関のような空間が設けられている。主屋南側の大半に CB 壁が築造されたことによって、2016 年^{*5}と比べると閉じた印象を受ける (Fig.2)。



Fig.1 2016年のK家 Fig.2 2022年のK家

2. 研究方法

今回の調査では、2014年から2019年に実施した調査方法を適用し、K家の実測調査と聞き取り調査を行なう^{*6}。その研究方法は、実測調査は、生活者立会いのもとに住居を測定し、民家内外の状態を図面やスケッチに描き記録する。聞き取り調査は、内容を限らず多様な語り

* 1) 深い軒下の半外部空間である。人の来訪の場となっており、風雨を防ぎ、雨戸を開放し蒸し暑さを凌ぐため、直射日光をさえぎり、光を調節して暑さを防ぐための建築的手段である。

* 2) 伊是名集落において、集落の南側を前辺 (めいひん)、北側を後辺 (くしひん) と呼ぶ。

* 3) 2014年9月から2019年11月までに、伊是名集落の民家160軒のうち後辺の悉皆調査、前辺の調査で計66軒を記録している。2020年3月に調査結果を報告書としてまとめ²⁾、伊是名村と伊是名地区と共有している。

* 4) 2020年、2021年は新型コロナウイルスの影響により現地調査を実施できず、2022年に調査を再開した。そして、2022年3月の集落訪問時にK家の変容に気づいた。改修の途中であったのではなかったかと考えられる。

* 5) 改修前のK家の情報は、2016年時点の情報である。

* 6) 2022年6月,10月,11月には、民家の実測・ヒアリング調査を行なった。

A Study Focusing on the South Side of the Main Building of a Traditional Ryukyu Private House
— the relationship between the renovation of House K and the trend of renovation of traditional private houses in the community —

An SHIMIZU, Kenichi SHINOZAKI and Haruyuki FUJII

を採集する。過去から現在までその時々の空間構成、生活の様子などに関して、聞き取りを行なう。調査は、動画や静止画を撮影し記録する。その上で、2014年から2019年までの調査資料*⁷と2022年の調査資料からK家の変遷をまとめる。本稿では、2016年から2022年にかけての改修に注目し、K家の改修内容と先に述べた集落の改修の特徴を比較し、居住者の語りを含めて考察する。

3. 2016年までのK家の改修による変遷

K家は、1955年に主屋が築造された。1960年には、主屋の西側に、風呂やトイレ、牛小屋、豚小屋などを含む付属屋が増築されている。その後、2016年頃には、炊事屋のある主屋西側の壁が木からコンクリートブロックに替わり、主屋の炊事屋南に流しが設えられている。外壁面となる南側正面の縁側南端にはアルミサッシュが設置されている。そのすぐ外側の外壁面には雨戸(板戸)が残っていた。この結果がFig.3の左の図である。

4. 2016年以降のK家の改修の事実

2016年から2022年にかけて行われたK家の改修内容は以下のとおりである(Fig.3)。

4.1. 一番座前に収納をつくる

一番座の南東角の縁側部分に木壁を取り付け、収納を設置する改修をしている(Fig.3①)。

4.2. CB壁を築造し、雨端を内部化する

二番座前から炊事屋前にかけて、雨端柱*⁸を取り去りその位置にCB壁を築造している(Fig.3②)。雨端につくられた土間はCB壁の内側で連続している(Fig.3③④)。改修前の家屋外壁面の柱とアルミサッシュは残しているが、雨戸(板戸)は撤去している。また、三番座前から炊事屋前までのCB壁には、窓を2つ設置しており土間から窓の下辺までの高さは1400mm程度である。

4.3. 二番座前に玄関をつくる

二番座前では、CB壁と土間を築造することで雨端を内部化しただけではなく、掃き出しの引き違い戸を設置し、玄関のような空間にしている(Fig.3③)。玄関としている二番座前の土間には靴箱を置いている。旧外壁面の縁側やアルミサッシュは、昔の状態のまま残している。

4.4. 炊事屋を南側に移動し、拡張する

2016年時に主屋北西にあった炊事屋が南西に移動し、炊事屋南側の土間を拡張している(Fig.3⑤)。二番座前の玄関から炊事屋まで連続する内部土間(Fig.3③④)の西端は引き違い戸の出入り口が設けられている。炊事屋の床は、板張りからモルタル仕上げに替わり、床レベルを土間からの高さを200mmから90mmに低くしている。

5. K家の改修の理由の語り

5.1. 4.1の改修に関する語り

一番座の南東角の縁側部分に収納をつくる改修をした理由として、「家族が多くなったから収納をつくった。」「収納が足りなくなった。」などの語りを得ている。

5.2. 4.2の改修に関する語り

二番座前から炊事屋前にかけて、雨端柱を取り払い、CB壁を築造し雨端を内部化する改修をした理由として、「雨端柱が傷んでいたから取り替えている。」「雨の日でも靴が濡れないようにしたい。」などの語りを得ている。また、「朝起きたら、すぐにお家の全部の戸を開けないと気が済まない。」という主屋の開口部の使い方に関する語りも得ている。

5.3. 4.3の改修に関する語り

二番座前に玄関をつくる改修をした理由として、「玄関をつくりたい。」「雨の日でも靴が濡れないようにしたい。」という語りを得ている。また、「(この玄関は,)自分たち(居住者)は使わずほぼお客さんの出入り口となっている。」「(夜間や留守以外は,)常に玄関の戸を開けっぱなしにしている。」「お客さんがきたときは二番座前で茶菓子や茶でもてなす。」など二番座前の使い方に関する語りを得ている。

5.4. 4.4の改修に関する語り

炊事屋を南西に移動し、土間を拡張する改修をした理由として、「炊事屋は広い方がいい。」「こっち(炊事屋側)の方は生活の中心になっている。」という語りを得ている。また、2016年時に炊事屋があった場所に風呂やトイレが設置されていることに関して、「主屋の中に風呂やトイレとかあると外に出なくていいから便利である。」という語りを得ている。

* 7) 調査資料は、①実測図(住居の現在の状態)、②テキスト化した会話記録、③(①②から)合理的に推論される住居の過去の状態(図面)、④改修部位ごとの変化シート(①~③より作成)である。

* 8) 雨端柱は、雨端の先端を支え、座敷前縁側の約半間外側に位置する柱である。

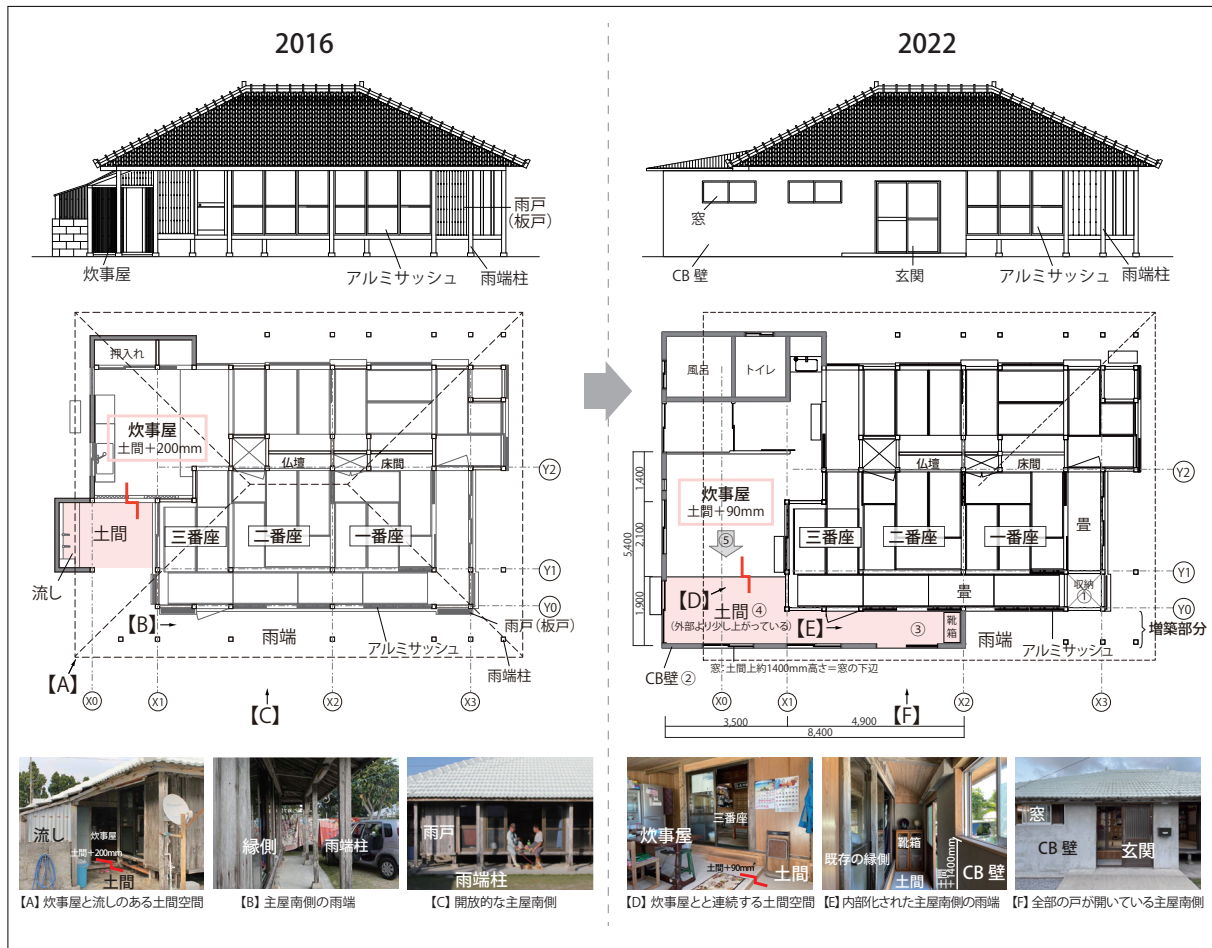


Fig.3 2016年～2022年の改修によるK家の変容

6. K家の改修と集落の特徴の比較

6.1. 4.1の改修の比較

4.1, 5.1より、一番座南東角に収納をつくる改修は、主屋内に収納空間を増やしたいという居住者の意識が結びついていると考えられる。

集落でも、K家と同様の理由で主屋一番座の南東角の縁側に新たに壁を新設して、収納をつくる民家が多くあることから、この改修は集落の特徴と共通している。

6.2. 4.2の改修の比較

4.2, 5.2より、雨端柱を取り払い、CB壁を築造し雨端を内部化する改修は、雨端柱は傷みやすいため頑丈で長持ちするCB壁にしたいという構造的な面と、雨の日でも靴が濡れないようにしたいという生活の面で、居住者の意識が結びついていると考えられる。

集落には、雨端を内部化する改修は多いが、主屋南面全面に掃き出しのサッシュを設けている民家や屋根の四隅をCB壁で固め構造補強する民家などK家とは異なる改修がみられる。しかし、材料や構法など改修の仕方が異なる

っていても、5.2のような改修の理由や改修部分の使い方はどの民家も共通している。改修前と比べても、雨端での過ごし方や使い方は変化しないことがわかる。

また、K家はCB壁で雨端を内部化することに加え、主屋南面にコンクリートブロックを高く積んでいる。改修前はもちろん、アルミサッシュを全面に入れる改修と比べて、壁面の透過性が低くなっている。それを補うように、5.3のような使い方をすることで、改修前の主屋南面の透過性を維持し、主屋の内部に光や風を取り込むことができるように窓を揃えるなどして工夫していると捉えると、妥当性があると考えられる。(Fig.3【C】【F】)。

6.3. 4.3の改修の比較

4.3, 5.3より、二番座に玄関をつくる改修は、雨の日でも靴が濡れないようにしたいという理由と主屋に玄関をつくりたいという理由が結びついていると考えられる。

集落でも主屋南側に玄関をつくる民家はあるが、三番座前に玄関をつくる事例が多く、二

番座前に玄関をつくる例はない。

しかし、5.3よりK家では、常に玄関の戸を開けていることや居住者は基本的に二番座前の玄関は使わないことから二番座前は居住者の主要な出入り口となっていないことに気づく。また旧外壁面の縁側やアルミサッシュは残しており(Fig.3【B】【E】)、いひゃじゅーて^{*9}の風習も改修前と変わらず残っている。これらのことから、K家では二番座前を玄関としている一方で、仏壇のある二番座の前は開け、お客さんを二番座前の縁側でもてなすなどの伝統的な沖縄の住まい方が改修後も継続されていることがわかる。集落の二番座前の特徴である、既存の縁側を活かす、改修しないという特徴とも共通しているとも捉えることができる。

6.4. 4.4の改修の比較

4.4, 5.4より、炊事屋に関する改修は、まず風呂やトイレが主屋北西に取り込まれたことにより、炊事屋が南西に移動した。そして、炊事屋を広くしたいという意識から土間を南に拡張し、床と土間との段差を小さくしたと考えられる(Fig.3【A】【D】)。

集落の他の民家でも、かつて付属屋に設置されていた風呂やトイレが主屋内に設置されたことで、主屋北西にあった炊事屋^{*10}が南西に移動する例が多くみられる。K家の改修は集落の他の民家の改修と共通している。

K家は、炊事屋の移動することに加えて、炊事屋の床の高さを下げたり土間を広げたことで、改修前に比べ、炊事屋と他の内部空間や外部との連続性を強くなったと考える。

7. 考察

K家の改修の実態の記録とK家と他の集落民家の比較から、伊是名集落における伝統的琉球民家の主屋南側の改修において、以下の2つのことがわかる。

7.1. 材料や構法の異なる改修をしても、改修理由や使い方が共通する場合がある

CB壁を築造し、雨端を内部化する改修を例として、集落民家とK家の比較によってK家の改修の仕方以外にもさまざまな改修の仕方があることがわかる。一見全く異なる材料や構法の選択をしているように見えても、改修の理

由や空間の使い方は民家で共通している場合があると考えられる。

7.2. 昔ながらの住まい方が継承されている場合がある

K家は、集落ではあまりみられない二番座に玄関をつくる改修や主屋南側にコンクリートブロックを高く積み上げて窓をつけるなど独自の改修をしている。しかし、かたちが変わっても、仏壇の前を開ける、二番座の前でいひゃじゅーてするなど居住者の行為や使い方は、改修前と変わらずに継承されている。改修を経て、伝統的な民家のかたちも変化しても、伝統的琉球民家で行われる居住者の生活行為や風習は継承されている場合があるとわかる。

8. まとめ

顕著な改修がみられたK家の改修について、改修内容と居住者の行為について調査・記録し、集落の特徴と比較し考察した。伊是名集落では、K家のように建て替えを選択せずに、改修をする民家が今も多く存在する。改修を行う民家では、居住者はさまざまな改修の仕方・材料を選択し、「CB壁を築造する」「土間をつくる」「アルミサッシュを設置する」など、いくつかの典型的な改修行為の組み合わせから、昔の伝統ある空間を残しながらも暮らしや環境に合わせて民家を改修していることがわかる。そして、民家の空間が変わっても、変わらない居住者の住まい方があることを明らかにした。

今後は、伊是名集落の対象民家を広げ、雨端の改修の仕方、材料、種類など細かく改修に関する要素を分けて、伝統的琉球民家の雨端の改修行為と人々の生活の関係性を追究していきたいと考えている。

謝辞

伊是名集落における研究は、東京工業大学藤井晴行研究室と日本大学篠崎健一研究室が共同で行っている。伊是名集落の皆様とこれまでの両研究室で調査研究にあたった関係者の方々に謝意を表す。

参考文献

- 1) 清水杏, 篠崎健一, 藤井晴行, 伝統的琉球民家の主屋南側の縁側空間の持続と変容の特徴について, 日本建築学会大会学術講演概要集, 2022, 159-160
- 2) 篠崎健一, 藤井晴行. ほか, 沖縄県伊是名集落調査まとめ(5冊組), 空間図式研究会, 2019

* 9) 伊是名集落では、二番座前の縁側や濡縁に茶盆を置いて通りかかった人など誰彼問わず茶や茶菓子をもてなす風習がある。

* 10) 伝統的琉球民家には、カネティと呼ばれるL型の平面形をした民家と、サギウルシと呼ばれる矩形の平面形をした民家があり、両者とも主屋の北西端に炊事屋が位置する。